101　誌上発表

日露海戦において負傷した ロシア人捕虜の症例記録写真

柳川　錬平[1,2]，坂井　建雄[1]

[1] 順天堂大学大学院医学研究科 解剖学・生体構造科学，[2] 自衛隊呉病院

日露戦役における日本海軍の医療活動については，海軍省医務局『日露戦役海軍衛生史』（以下，「衛生史」），同『The Surgical & Medical History of the Naval War between Japan & Russia during 1904–1905』（以下，「英語版」），海軍軍令部『明治三十七八年海戦史　第四巻　医務衛生』（以下，「海戦史」）と，3つの公刊戦史が現存し，中でも「衛生史」は国立国会図書館のデジタルライブラリーで公開され，インターネットを介して世界中から閲覧可能となっている．他方，海上保安大学校図書館（広島県呉市）では，昭和26年に日比谷図書館から旧海軍大学校図書（約8000冊）の寄贈を受けて以来，途中で日本財団等の助成を受けて脱酸処理を施しながら，これらを貴重図書として現在に至るまで良好な状態で保存している．同図書館には上記3件の公刊戦史も貴重図書の一部として各1冊が収蔵されており，今回はこれらを現物で比較する機会を得て発見した事象について報告する．

まず，3冊の厚さを比較すると，「海戦史」が最も薄く，「英語版」が最も厚い．ところが，本文を比較しながら一頁ずつ繰ってみたところ，これらの中身は同一部署（海軍省医務局）で執筆された同一文書であり，「衛生史」と「海戦史」との厚さの差は即ち付録の差であることが判明した．つまり，「海戦史」と「英語版」とが，解剖学的部位別に日露の症例をとり混ぜて代表的な96例が列挙された本文部分まで（および，その英訳）に留まるのに対し，「衛生史」は上記の本文に加えて付録写真集（日本人74例＋ロシア人62例の記録写真に，それぞれの写真に対応する氏名・診断・経過概略を数行ずつ記した説明欄が添付されたもの）を収載していた．また，この時点で，国会図書館がインターネットで公開している「衛生史」は付録写真集の後半部分（ロシア人症例の全部）を省いたものであることが判明した．

現物の「衛生史」にのみ収載された付録写真の中に，ただ1例のみ，説明欄に「缺」（現代の字体で「欠」）の一字だけが記された症例を認めた．写真からは前頭部に陥没する挫創と右大腿の挫創とが確認できたので，これに該当する症例を本文中で探したところ，第四章第四節「頭部顔面及ヒ頸部ノ創傷」に受傷部位が一致する唯一の症例を発見した．診断は「前頭部挫創兼前頭骨外板骨折　右大腿挫創　右内踝挫創兼骨傷　背部挫傷」で，氏名の欄には「ジノウキー，ペトロウキッチ，ロジェストウェンスキー」と記されていた．一方，他の症例写真に，ロジェストウェンスキーの名が掲げられたものは無かった．

日露戦役における海戦で収容された捕虜の内，ロジェストウェンスキー提督（露国第二太平洋艦隊司令長官　海軍中将）は最も高位かつ有名な人物として知られている．佐世保海軍病院に入院中の同提督を東郷平八郎が秋山真之らと見舞い，病院長の戸塚環海が立ち合っている光景を描いた絵は，広島県江田島市の旧海軍兵学校（現・海上自衛隊 第一術科学校 教育参考館）にも展示されている．そこで，佐世保海軍病院に関連する資料からもロシア人捕虜を辿ってみたところ，当時の病院長であった戸塚環海による「日露戦役醫事摘錄」と題された論文が昭和初期の海軍軍醫會雑誌に掲載されていることが判明した．これを閲覧すると，同論文にも付録として21例（内，ロシア人7例）の症例概要が列挙されており，そこでもロジェストウェンスキー提督の名前を見つけることができた．診断については「衛生史」とほぼ同様に，「1　前額部挫創兼前頭骨骨折，2　右大腿部及左足部挫創，3　背部擦過創」と記されており，論文に収載されたロシア人症例の内で唯一「缺」の写真との照合で受傷部位に矛盾が無かった．「缺」とだけ記された時代背景にも思いを致せば，当該写真の人物がロジェストウェンスキー提督である可能性は極めて高いものと思われる．